

完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 大分県大分市府内町3丁目10番1号
管理機関 大分県教育委員会
代表者名 教育長 岡本 天津男

令和4年度マイスター・ハイスクール事業に係る完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和4年 4月 1日(契約締結日)～ 令和5年 3月31日

2 管理機関

①管理機関(市区町村・都道府県)

ふりがな	おおいたけんきょういくいいんかい
管理機関名	大分県教育委員会
代表者職名	教育長
代表者職名	岡本 天津男

②管理機関(産業界) ※2団体以上ある場合は、適宜、欄を追加して記入してください。

ふりがな	おおいたえーあいてくのろじーせんたー
管理機関名	おおいた AI テクノロジーセンター
代表者職名	センター長
代表者氏名	村上 憲郎 (元 Google 副社長兼 GoogleJapan 社長)

②管理機関(産業界)

ふりがな	かぶしきかいしゃぴーすかんぱにー
管理機関名	株式会社ピースカンパニー
代表者職名	代表取締役社長
代表者氏名	矢田 照久

②管理機関(産業界)

ふりがな	ぜんこくのうぎょうきょうどうくみあいれんごうかい
管理機関名	おおいたけんほんぶ 全国農業協同組合連合会 大分県本部
代表者職名	県本部長
代表者氏名	藤田 明弘

③管理機関（学校設置者）

ふりがな 管理機関名	おおいたけん 大分県
代表者職名	知事
代表者職名	広瀬 勝貞

3 指定校名

学 校 名 大分県立大分東高等学校
 学校長名 佐藤 秀信

指定校名 2

学 校 名 大分県立久住高原農業高等学校
 学校長名 佐藤 智之

4 事業名

農山漁村を牽引する担い手確保・育成事業
 ～農業系高校と産業界との一体・同期化による次世代担い手育成プロジェクト～

5 事業概要

本県の農業は、高齢化などにより農業経営体数は減少する一方、経営体の法人化や生産規模の拡大が進んでいる。帰農者や新規参入による新規就農者数は増加しているが、高齢化による離農等が起これり人手不足は深刻な状況であり、新規学卒者を拡充していく必要がある。

魅力ある農山漁村づくりの核となる担い手を確保・育成するため、先進的な農業者等との連携は基より、先進的なスマート先端技術の開発及び活用による社会全体のイノベーションに取り組む IT 企業等と連携して、農林水産高校生を対象とした実践的な授業等を行う。その取組から得られた知見を他校に還元し、県農業教育全体の魅力向上、高い志をもった大分県農業のリーダーとなる人材の確保・育成を目指す。

6 学校設定教科・科目の開設，教育課程の特例の活用の有無

- ・学校設定教科・科目 開設している ・ 開設していない
- ・教育課程の特例の活用 活用している ・ 活用していない

7 意思決定機関の体制（マイスター・ハイスクール運営委員会）

氏名	所属・職
岡本 天津男	大分県教育委員会 教育長
矢田 照久	株式会社ピースカンパニー 代表取締役社長
渡辺 律子	おおいた AI テクノロジーセンター 事務局次長
江藤 稔明	株式会社ザイナス 代表取締役社長
稲木 隆文	株式会社オートバックスセブン SX 事業推進部長
藤田 明弘	全国農業協同組合連合会大分県本部 県本部長
佐藤 章	大分県農林水産部 部長
利光 秀方	大分県商工観光労働部 部長
佐藤 秀信	大分県立大分東高等学校長
佐藤 智之	大分県立久住高原農業高等学校長

8 事業推進機関の体制（マイスター・ハイスクール事業推進委員会）

氏名	所属・職
大田 一郎	株式会社ピースカンパニー メディア・プロデューサー
原田 美織	おおいた AI テクノロジーセンター 事務局次長
山田 誠司	大分県教育庁高校教育課長
吉止 勝幸	大分県農林水産部地域農業振興課長
佐藤 元彦	大分県商工観光労働部先端技術挑戦室長
江藤 彰悟	株式会社ザイナス 取締役副社長 教育事業部部長
古屋 勝二	株式会社ザイナス 教育事業部 シニアコンサルタント
渡邊 博人	株式会社オートバックスセブン SX 事業推進部
梶原 敏弘	全国農業協同組合連合会大分県本部 営農開発部次長 兼 直販開発課長
佐藤 秀信	大分県立大分東高等学校長
佐藤 智之	大分県立久住高原農業高等学校長
足立 伸也	大分県教育庁高校教育課 指導主事
加藤 貴浩	大分県農林水産部地域農業振興課 主査
本田 真也	大分県商工観光労働部先端技術挑戦室 主幹
住田 武彦	大分県立大分東高等学校 農場主任
田尻 吉崇	大分県立久住高原農業高等学校 農場主任

9 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

<大分県立大分東高等学校>

業務項目	実施日程												
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
基礎講座 (農業とIT)						授業			授業			まとめ、報告書作成 運営委員会・事業推進委員会	
ドローン操作方法等	CEO配置 学校と打ち合わせ	契約手続き	運営委員会・事業推進委員会			授業							
データ分析							授業						
AI画像認識									授業				
振り返り										授業			
プロジェクト研修										授業			
環境データ収集				→									
インターンシップ				○									
データ分析						→							
AIエンジン作成						→							

<大分県立久住高原農業高等学校>

業務項目	実施日程												
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
基礎講座				授業								まとめ・報告書作成 運営委員会・事業推進委員会	
デザインシンキング	CEO配置 学校と打ち合わせ	契約手続き	運営委員会・事業推進委員会	→									
資料作成・発表				→									
スマート機材に触れる				→									
データ分析	→												
マーケティング						→							
インターンシップ				○									

(2) 実績の説明

○管理機関による事業の管理・運営方法

4月1日に国からの委託決定通知を受け、CEOの決定、学校への配置を行い、事業計画の打ち合わせを行う。

6月にかけて産業実務家教員との委託契約を行い、7月に久住高原農業高校にて運営委員会・事業推進委員会を開催し、事業の承認を得る。

学校での授業については、高校教育課、CEO、学校担当者、産業実務家教員で年間の授業について打合せを行い、予定を立てて実施。

2校でテーマが異なるため、授業の開始時期がずれるが、問題なく開始。マイスター・ハイスクール対象の授業へは産業実務家教員・学校教科担当者に加え、CEO、高校教育課も視察を行い、授業後は振り返り、次回の授業の打ち合わせを行う。

11月に行われた中間成果報告会では、2校のCEOと高校教育課担当者が参加。2校の取組について説明し、アドバイスを受ける。分化会に参加し、各県の担当者と情報交換ができた。

2月に運営委員会・事業推進委員会を大分東高校で実施。伴走者である羽田野教育プランナーにも参加いただき、令和4年度の事業進捗状況と令和5年度の事業計画について発表。両校とも3月まで授業を実施し、年間の授業反省を行う。その結果を令和5年度の事業計画へ反映していく。

○管理機関それぞれの役割分担

①地方自治体：大分県

運営委員会、事業推進委員会の企画・運営、事業の経過観察、内容についてアドバイス

②産業界：株式会社ザイナス、株式会社オートボックスセブン

授業の計画・実施、必要物品購入、成果物提出

③学校設置者：大分東高等学校、久住高原農業高等学校

CEOと産業実務家教員との打合せ、授業へ参加

10 事業の実績

(1) 実施日程

<大分県立大分東高等学校>

業務項目	実施日程														
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月			
基礎講座 (農業とIT)						授業			授業						
ドローン操作方法等	CEO配置、学校と打ち合わせ	契約手続き、打ち合わせ	運営委員会・事業推進委員会			授業						運営委員会・事業推進委員会			
データ分析							授業								
AI画像認識								授業							
振り返り											授業				
プロジェクト研修											授業				
環境データ収集							→								
インターンシップ							○								
データ分析										→					
AIエンジン作成										→					
															まとめ、報告書作成

(2) 実績の説明

【1】年度当初の事業計画書に基づき実施した取組内容について

<1年生：学校職員と内容に応じて産業実務家教員が立ち会う>

①基礎講座（農業とIT）

スマート農業の目的、農業におけるDXについての説明。農業の未来、新たな農業の職業像、農業現場でのテクノロジー活用・応用事例を紹介など。



②応用講座

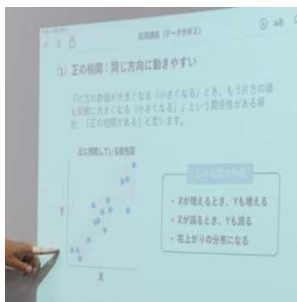
a)ドローン操作（プログラミング）

ドローンとは、なぜ飛ぶのか、ルール等について説明。動かすためのプログラミング基礎や利用するアプリ「TELLO EDU」の説明。実習方法の説明。グループでの操作実習など。



b) データ分析

スイートコーンの収穫データを使ったプリントでの演習。度数分布表やヒストグラム等の書き方。分散と標準偏差の説明。Excelを使ったデータ分析の実施など。



c) AIプログラミング：JetsonNano

AIとは、種類（画像認識、音声認識等）説明。画像分析について仕組み、身近な事例などの説明。JetsonNanoの説明。サムズアップダウンの画像識別実習など。



③プロジェクト研修

これまでの授業を振り返って、学んだこと、感じたことを洗い出す。学んだ技術が、農業や園芸にどのように活かせるかを想像しアウトプットと、一緒に学んだ他の生徒の意見も聞いて、まとめ、発表する。



< 2年生：産業実務家教員が実施 >

①環境データセンサーの設置

イチゴ温室に環境データ計測用のセンサーを設置。



②農業法人との連携

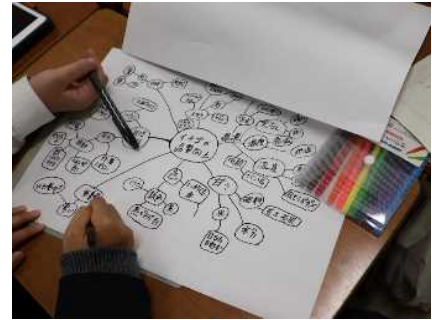
環境データセンサーを設置している農業法人との連携を開始。データ交換や現場の課題など情報交換を実施。

AI画像識別に使う画像収集や現場の課題などの情報を交換。園芸ビジネス科2年1組の実習時間にあてて画像収集を実施。



③ 1年次の学び振り返り+マインドマップを使ったテーマ選定

1年生の授業を振り返り「イチゴの品質向上」をテーマに、マインドマップを作成することで関係する要素を見える化し班ごとに発表を行った。イチゴの品質に直結する要素「色」「形」「大きさ」「甘さ」などからさらに関連する要素を洗い出し、AI、データ、ドローンの利活用を検討した。



④ 「Orange」を使ったデータ分析

圃場に設置したデータセンサーのデータ分析に向けて、データ分析ツール「Orange」の使い方を学んだ。1年間を通じたアイスクリームの売上数と気温等のデータを使い、視覚化されたデータや相関係数をもとに、相関関係と因果関係の仮説の立て方などを学んだ。



⑤ 「AIMINA」を使った AI ディープラーニング

いちごの「身崩れ(実が運搬時の振動等により崩れること)」を防止するため、適切な収穫時期を AI で判別するべく、プログラミング不要の AI 学習ツール「AIMINA」の使い方を学んだ。

おおいた AI テクノロジーセンサーと連携するソフトバンクグループ企業の SBC&S 社の支援にて実施。メディアの取材も多数あった。



⑥ AI エンジンの作成

プログラミング不要の AI 学習ツール「AIMINA」を用いて、必要な AI エンジンの作成に挑戦した。当初いちごの身崩れ防止のため、収穫時期の判別を目的としていたが、農業法人との連携の中で、等級判別の需要が高いことがわかり方針転換を行った。画像のクレンジングも実施。



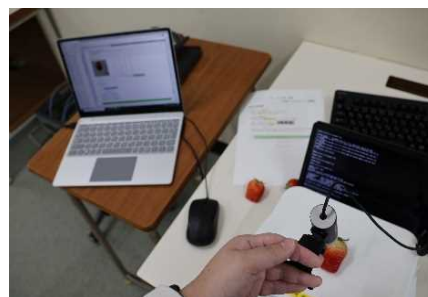
⑦環境データセンサーで取得したデータ分析

圃場の環境データといちごの収穫データ（採取区、収穫数、収穫量、1果重、糖度、室温等）を参照しながら、品質のよいイチゴを育てるために必要なこと（要因）を検討した。



⑧AI エンジン仕上げ+まとめ

イチゴの等級判別 AI エンジンを仕上げて判別テストを実施。環境データ分析やドローンによる灰色かび病防止のドローン露飛ばしなどの成果まとめに着手。



【2】最先端の職業人材育成に資するカリキュラム開発等の状況

1年生は教科「農業と環境」「総合実習」内で実施。令和4年度は学校職員が昨年度の産業実務家教員が作成した資料等を基に、授業を実施。専門的な実技を伴う授業は産業実務家教員が実施。カリキュラムの更新をせず、現在の教科内の指導内容と関連する箇所での授業を実施することができた。1年生についてはカリキュラムの更新は行わず、現在のままで実施できると感じている。

2年生についても既存の教科内で実施し、データ分析の方法や画像診断等の1年次の学びを応用しAIエンジン作成など成果がでている。来年度も同じ授業を学校職員が実施することで、事業終了後の自走ができるようにしていきたい。

【3】学校全体の事業実施体制について

- ・マイスター・ハイスクール CEO：学校と産業実務家教員、県教育委員会の調整役として活動。自身が持つ情報処理力により打ち合わせ日程の調整や、授業の記録、最新の機器をもつ外部講師との連絡調整、報道機関への連絡などを行う。
- ・産業実務家教員：学校における授業テキストの準備、授業の実施、授業後の振り返りなどを行う。

【4】事業の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組み

- ・学校での授業実施後、CEO、学校担当者、産業実務家教員、県教委担当者で会議を行い、振り返りや次回の内容について等、打合せを行う。その中で、改善点などの協議を行う。必要に応じて伴走者に相談する。
- ・令和4年度は一部学校職員でマイスター・ハイスクール事業を実施したが、産業実務家教員のサポートもあり、大きな問題はなかった。

【5】カリキュラム開発に対する運営委員会や推進委員会における取組

- ・マイスター・ハイスクール事業がスタートして2年が経ち、1・2年生の授業を実施することができた。
- ・【2】でも記述したが、1年生の授業については令和3年度を取組を活かし、学校職員で授業を行うことができた。現状の教育課程内で実施することができたことから、変更の必要性はないが、専門的な実技等は産業実務家教員に実施してもらう必要がある。
- ・2年生については、1年生で学んだことを活かし、地域農家の課題を解決するためのテーマ別課題解決学習に取り組んだ。2年生についても既存の教育課程内で実施しており、データ収集等は日頃の授業で習得することができた。
- ・運営委員会、推進委員会でも現段階では支障なく進んでいることを伝えている。
- ・令和5年度は3年生での授業を実施する予定である。授業の内容をしっかりと管理し、生徒の学びに繋がるものとし、令和6年度からの自走に向けて調整していきたい。

【6】取組に対する指導助言等に関する専門家からの支援

- ・課題解決学習のテーマとして「イチゴ」を取り上げ、地域のイチゴ農家と連携し課題の有無やその解決に学んでいるスマート農業が活かさないかを検討してきた。農家からは学校では思いつかない課題を提供してもらい、農家としてはその解決をしてもらうというWINWINの関係ができています。
- ・中間成果報告会では、「イチゴ」をテーマに病害虫の予防や実崩れによる品質の低下等を解決できるようスマート農業を活かして学習していくことを発表した。評価委員の方からはとてもよい取組で積極的に行ってもらいたいとアドバイスをいただいた。
- ・運営委員会・事業推進委員会に参加してもらっている大分県農林水産部や大分県商工観光労働部、全国農業協同組合連合会大分県本部の方々より、イチゴ農家の課題、その解決に取り組んでいることへの賛同をいただいた。農業分野について相談等があれば、関係部署・関係者の紹介をしてくれると意見をもらった。

【7】成果の発信や普及方法・実績

- ・発信については、新聞等に授業の取材を依頼。地元テレビ局や新聞社に取り上げてもらった。また、学校のホームページでも情報を発信。

<久住高原農業高校>

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
基礎講座	授業											
デザインシンキング・アイデアソン	CEO配置学校と打ち合わせ	契約手続き		運営委員会・事業推進委員会								運営委員会・事業推進委員会
資料作成・発表												
スマート機材に触れる												
データ解析と仮説												
マーケティングについて												
インターンシップ							○					
まとめ・報告作成												

(2) 実績の説明

【1】実施内容

<1年生>

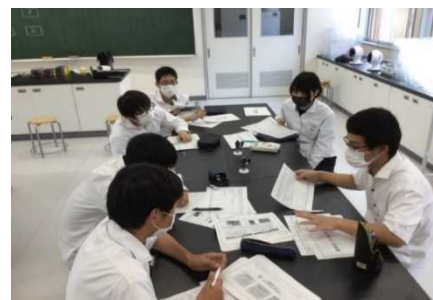
①基礎講座

Society5.0 について。農業で活用されている技術を紹介。ドローンの活用やIoTセンサーについて学ぶ。



②デザインシンキング・アイデアソン、資料作成

デザインシンキングやアイデアソンの定期的な学習や体験を通じて“アイデアの出し方”“考え方”“聴き方”“伝え方”を体得する。自分やチームの考えを規定時間内にまとめ、それを発表することを通じて、将来生徒が自分のアイデアやPRする際の基礎を身につける。



③IoT 機材・最新技術

農業分野での活用が拡大しそうな技術を筆頭に、様々なIoT 機材や最新技術の知識を身に着け、スマート農業の一端に触れてみる（ドローン操作やスマート百葉箱）。



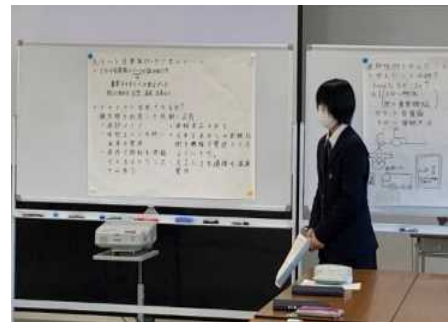
④データ解析と仮説

スマート農業に必要となる“データ分析”や“データ解析”について基本的な知識を身に着け、データを活用した農業の実践に親和性を持たせる。



⑤年間のまとめ

自分やチームの考えを規定時間内にまとめ、それを発表することを通じて、将来生徒が自分のアイデアやPR する際の基礎を身につける。1年間学んできたことを模造紙にまとめ、全体で発表し知識・技術の定着状況を確認した。



< 2 年生 >

①基礎講座

近年の農業事情やスマート農業について復習した。また、卒業後のことを考えるため農業法人が求める価値の変化についても学習した。

スマート農業

【スマート農業とは何か？】
現在：経験と勘に頼った農業の実践
未来：ロボット技術や情報通信技術(ICT)を活用して、省力化・精密化や高品質生産を実現する等を推進している新たな農業の実践

【現状】
一部で実績あり
※弊社では2021年から久住高原農業高校と連携した授業を実施中

【課題】
・データやサービスが個々で完結している
・導入コストが高く、小規模農家では導入が難しい
・最新技術の導入に消極的なケースが少ない

資料：農研機構「スマート農業」
<https://www.affrc.go.jp/SmartAgriculture/2020/02/01/>

AUTOMACS SEVEN

②デザインシンキング・アイデアソン、資料作成

1年次に学んだデザインシンキングやアイデアソンをさらに深化させるため繰り返し実践。

テーマ) 『竹田市内で就農してもいい!』と思うようになるにはどうしたらいいか』など。



③マーケティングについて（農家・法人に学ぶ）

栽培した農作物を販売するための資料やデザインについての知識を習得するために、販売している農家より話を聞き、アイデアソンを行う。



④年間のまとめ

自分やチームの考えを規定時間内にまとめ、それを発表することを通じて、将来生徒が自分のアイデアやPRする際の基礎を身につける。1年間学んできたことを模造紙にまとめ、全体で発表し知識・技術の定着状況を確認した。



【2】最先端の職業人材育成に資するカリキュラム開発等の状況

令和4年度は1年生は教科「農業と環境」「総合実習」、学校設定科目「My農場」で、2年生は「総合実習」や学校設定科目「My農場」で授業を実施。現状の授業内で実施できており、学校からも授業をしにくいといったことは報告されていない。

マイスター・ハイスクール事業の授業内容が既存の教科と該当することが多いことから、教科の学びの中に取り入れることができている。令和5年度が最後の年となるが、同様の授業を実施し、令和6年度からは学校職員が実施できるように再度、調整を行っていきたい。

【3】学校全体の事業実施体制について

- ・マイスター・ハイスクール CEO：学校と産業実務家教員、県教育委員会の調整役として活動。産業実務家教員はAI、IoTなどには特化しているが、農業の生産現場については勉強不足のため、CEOが地元農家の現場を見学する機会を設ける、農家と学校をつなぐパイプ役となっている。マーケティングの外部講師はCEOの紹介。また、打ち合わせ日程の調整や、授業の記録、報道機関への連絡などを行う。
- ・産業実務家教員：学校における授業テキストの準備、授業の実施、授業後の振り返りなどを行う。

【4】事業の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組み

- ・大分東高校同様に、学校での授業実施後、CEO、学校担当者、産業実務家教員、県教委担当者で会議を行い、振り返りや次回の内容について等、打合せを行う。その中で、改善点などの協議を行う。必要に応じて伴走者に相談する。
- ・昨年度は学校職員が授業に参加していないことが多かったが、本年度は事業終了後の自走を見据えて、参加し産業実務家教員の授業を体験している。

【5】カリキュラム開発に対する運営委員会や推進委員会における取組

- ・大分東高校同様、1・2年生の授業を実施することができた。
- ・【2】でも記述したが、現状の教育課程内でマイスター・ハイスクール事業を実施することができたことから、カリキュラムの変更の必要性はないが、内容については常にPDCAを行い改善していく必要がある。
- ・運営委員会、推進委員会でも現段階では支障なく進んでいることを伝えている。
- ・令和5年度は事業最後のものとして、今一度授業内容を全体で話し合い、生徒の学びに繋がるものとし、令和6年度からの自走に向けて調整していきたい。

【6】取組に対する指導助言等に関する専門家からの支援

- ・久住高原農業高校では学校運営委員会が組織されており、委員の中には大学教授や市の農政担当、地域農家などがおり、学校の学びに対して協力してもらっている。さらに、運営委員会・事業推進委員会では大分県農林水産部や大分県商工観光労働部、全国農業協同組合連合会大分県本部の方々に参加してもらっており、組織としては十分なものとなっている。
- ・中間成果報告会では、デザインシンキングやスマート百葉箱を活用した環境の「見える化」を行い、地域農業の課題解決学習に取り組むことを発表した。評価委員の方からは地域の農家ともっと連携してもらいたいとアドバイスをいただいた。

【7】成果の発信や普及方法・実績

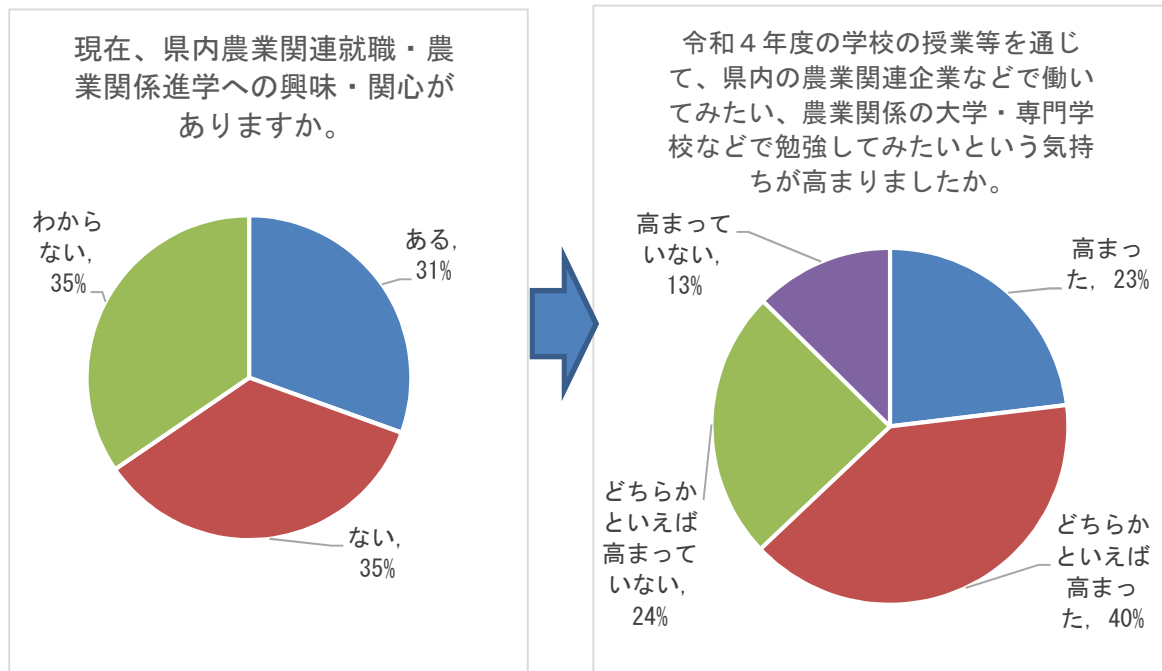
- ・発信については、新聞等に授業の取材を依頼。公益財団法人産業教育中央会が発行する「産業と教育」や地元の新聞社に取り上げてもらった。

1.1 目標の進捗状況、成果、評価

(1) 目標の進捗状況、成果（定量的目標）

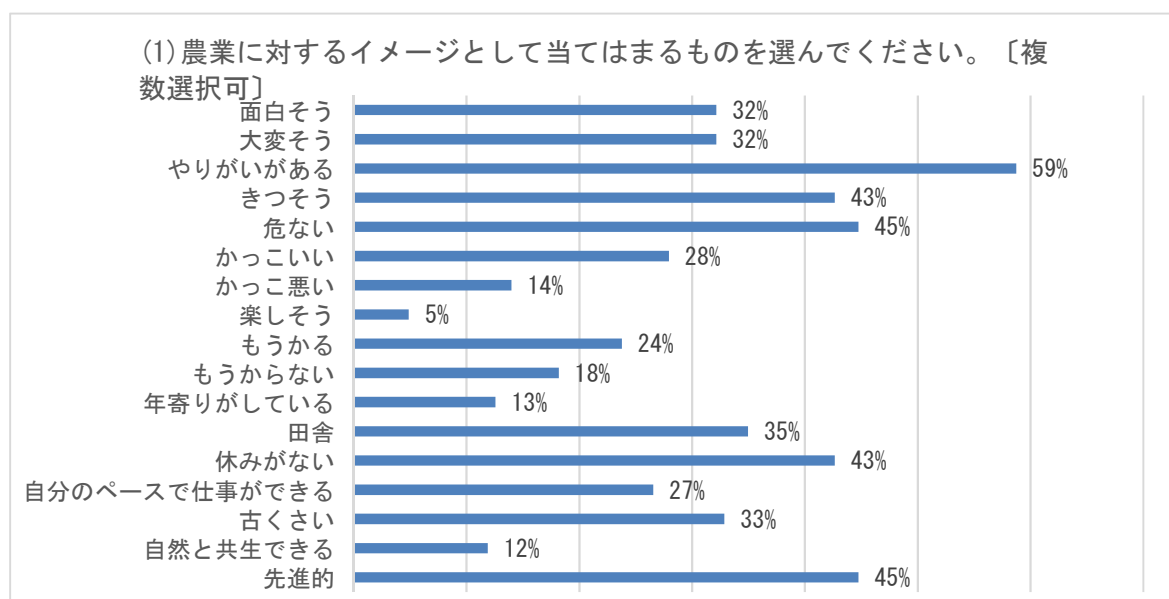
		①県内農業関連就職・進学への関心が高まった生徒の割合 (%)	②県内農業関連就職及び進学を希望する生徒の割合 (%)	③大分東高校・久住高原農業高校における入試充足率 (%)
R4年度	目標値	50%	35%	95%
	達成値	32%	34%	78.9%

①県内農業関連就職・進学への興味関心が高まった生徒の割合（％）



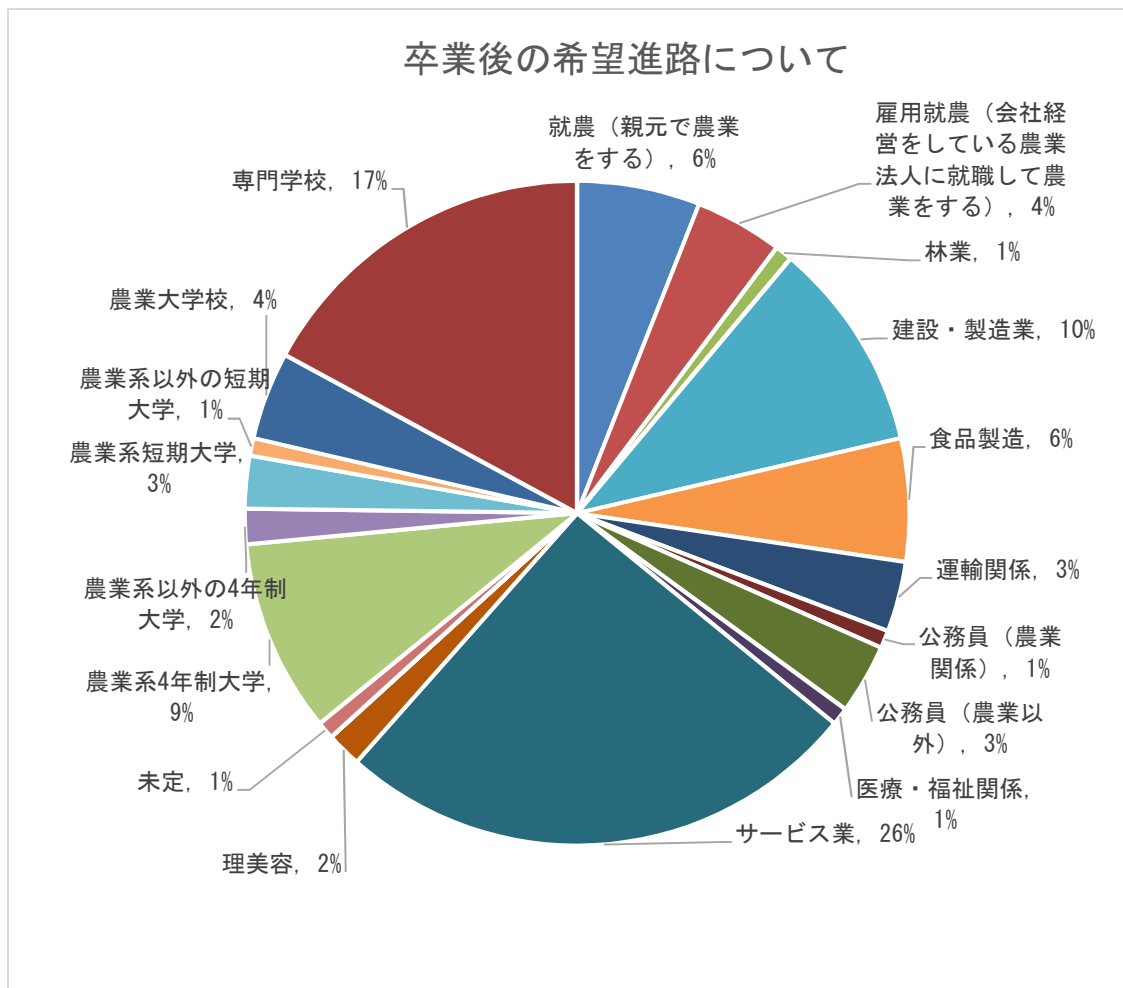
対象の大分東高校1、2年生、久住高原農業高校1、2年生へ事業実施前と、事業実施後にアンケートを実施。事業実施前に農業関連就職・進学への興味・関心が「ある」31％に対し、実施後に働いてみたい・勉強してみたい気持ちが「高まった」「どちらかといえば高まった」割合が63％と増加しており、事業の効果が見られたと考えられるが、目標値には達しなかった。

対象の2年生は令和3年度よりマイスター・ハイスクール事業を受けており、令和3年度末のアンケートでは「高まった・どちらかといえば高まった」生徒が46％であった。そのことがあり、令和4年度の事業実施前アンケートでの『農業関連就職・進学への興味・関心が「ある」』割合が高く、思ったほどの伸びがでなかったと考えられる。数値としては決して低いものではないため、令和5年度で3年生が実際に農業関連就職・進学を選択するかが楽しみである。



アンケート項目には「農業に対するイメージ」も聞いているが、以前は「大変そう」「きつそう」といったマイナスイメージをもつ生徒が多かったが、事業後のアンケートでは「大変そう」

「きつそう」といったイメージはあるものの、「やりがいがある」といったプラスのイメージも高くなっている。また、スマート農業について学習したためか「先進的」といったイメージも高くなっている。これが3年生になってからの進路に影響すること期待したい。



大分東高校、久住高原農業高校の1、2年生で農業関係の就職（就農、雇用就農、林業、食品製造、公務員）、農業系の進学（農業系4年生大学、農業系短期大学、農業大学校）を希望する生徒は34%であった。昨年度と比較すると1%増えているが、目標数値には至らなかった。

2校とも地域農業の課題解決学習などを行っているが、いざ自分が農業関連で働くことを考えるとその姿は想像できていないようである。進路については、マイスター・ハイスクール事業の中だけではなく、日頃の授業の中で折に触れて教員から話してもらう必要がある。また、地域の中で儲けている農家を視察することで、農業に夢をもてる取り組みをしていく必要がある。

スマート農業をテーマとしていることから、工業系への希望をもっている生徒もいるようである。将来、工業的観点から農業に関わっていくことを考えて就職・進学した生徒については、農業関連就職・進学としてカウントしてもよいのではないかと考えるが、運営委員会、事業推進委員会で検討したい。

③大分東高校・久住高原農業高校における入試充足率（％）

	募集人員	合格者数	充足率（％）
大分東高校 園芸ビジネス科	30	30	100.0
大分東高校 園芸デザイン科	30	20	66.7
久住高原農業高校	40	28	70.0
平均			78.9

充足率は2校とも昨年度よりも向上しているが、目標とする数値を達成できていない。運営委員会の中でも本目標が適切なのかという指摘があったが、高校教育課、2校の校長先生としては達成すべき目標として継続することとなった。

2校とも学校での体験入学やHP、Facebook、各種メディアを通じて情報発信に取り組んでいるが、定員募集に繋がっていない状況である。残り1年となる中で、株式会社ソフィアによるPR動画を活用したり、生徒の出口の情報発信などに取り組み、農業系高校でも最先端の学びと進路保障がしっかりしている点を周知して、生徒・保護者が興味関心を持ってもらい入学に繋がる動きをとっていきたい。

来年度の成果指標については、運営委員会・事業推進委員会の中でも協議したが、現在の目標値で取り組むこととなっている。2年目で達成できていないことが3年目で達成できるのかという指摘もあったが、目標値として学校と協力して取り組んでいきたい。

1.2 次年度以降の課題及び改善点

(1) 2校に共通する課題及び改善点

- ・カリキュラム改訂の検討について
 - 令和4年度で1、2年生までの授業形態を確立することができた。2校とも現在のカリキュラムの中で専門教科の取り組みとして導入し、教科の目標とあった授業としてきた。特に学校現場より困りの声はなく、この形態を進めてよいと考えている。令和5年度は3年生の授業を実施していくが、これも今のカリキュラムで実施できそうである。
- ・令和6年度からの自走について
 - 令和5年度で事業が終了することから、その後の授業をどうするか。今の考えとしては、今までの産業実務家教員が作成した資料を基に、学校で教員が授業をしていき、外部講師として実技等を行ってもらおうことを考えている。その予算は高校教育課が行う「事業」予算として計上するよう考えている。
- ・CEOの常備配置、令和6年度からについて
 - 大分県でのCEOは本業がある中、高校での事業を担当してもらっている。そのため「会計年度任用職員」という形で学校に入ってもらっている。来年度の常設について話をしたが、本業があるため難しいということであった。そのため、令和5年度につ

いても「会計年度任用職員」での配置としている。令和6年度からは各校で行うコンソーシアムと呼ばれる協働団体に参加してもらい、アドバイスをしてもらおうと考えている。

- ・2校の交流

→大分県では2校が採択されており、今までも交流授業の話が上がったがコロナ禍などにより実施できていない。令和5年度は2校の学びをお互い体験できる交流授業を実施したいと考えている。

(2) 大分東高校

- ・テーマについて

→令和4年度は野菜「イチゴ」をテーマに活動を行った。令和5年度は「草花」をテーマに研究を行いたいと考えているが、草花でのスマート農業を活用したテーマについて苦慮している。運営委員会、事業推進委員会で意見をもらい、適切なテーマを設定していきたい。

- ・農業関連就職、進学者について

→アンケートから大分東高校の生徒は、久住高原農業高校の生徒に比べ、農業への興味関心が低い傾向がある。そういった最初から興味・関心がない生徒をどうやって振り向かせるかがテーマでもあった。アンケート結果から『県内の農業関連企業などで働いてみたい、農業関係の大学・専門学校などで勉強してみたいという気持ちが高まった』生徒割合は40%と高い結果であったが、『卒業後の進路希望』では農業関連を希望する生徒割合は少なかった。これは農業で生活していくというイメージが不足していることが原因と考えられる。今後、事業の中でスマート農業などの最新技術の学びを続け、その中に経営の視点も取り入れ、農業という仕事のことを想像できる工夫が必要と考える。CEO、産業実務家教員と協議していきたい。

(3) 久住高原農業高校

- ・スマート百葉箱の他校への展開

→令和3年度に生徒の意見をもとに産業実務家教員が開発した「スマート百葉箱」については、令和4年度も話題となり改良を重ねより良いものとなっている。事業の他校への展開も課題としてあったことから、「スマート百葉箱」を他校に設置し、同じ観測機器を使用することで新たな学びができると考えている。そのことを他校の教員とも検討していきたい。

- ・経営感覚の醸成

→久住高原農業高校へ入学する生徒は農業への意識が高い傾向がある。令和4年度の卒業生は生徒数の半分が農業関連就職・進学に進んでいる。そのような下地がある中、『県内の農業関連企業などで働いてみたい、農業関係の大学・専門学校などで勉強してみたいという気持ちが高まった』生徒割合の伸び率は今ひとつであるといえる。今年度、外部の農家より販売等について話を聞くことができ、自分たちが栽培・製造したものが売れなければ生活ができないことを知ることができた。そのためか、『卒業後の進路希望』で農業関連を希望する生徒が少ないのかもしれない。

引き続き、本事業でスマート農業を学び農業の価値転換を図ると同時に、農業現場の課題解決学習を実施していきながら、どんなものにどれだけ費用がかかるかといった農業経

営のことも学んでいく必要がある。マイスター・ハイスクール事業の中だけでは難しいことなので、学校の授業と同時進行できる体制をとれるように検討していきたい。